

「論理的」という言葉を日常語に

三森ゆりか

「ディズニー映画を嫌いだ」という記事を私は読んだことがある。その理由は、例えば「ピーターパン」に登場するウェンディが、ひっきりなしに「何かと理由を口にする……」と理由を口にするからだそうだ。記事の筆者は、ディズニー映画は理屈っぽい、と結論づけていた。欧米人の言語環境では、根拠をあげて論証するのはごく自然なことだ、当然のことながら「論理的」という言葉も日常語である。サッカーを見ているも解説者は「論理的」を連発するし、幼児でも自分の考えを「論理的」という言葉を用いて説明しようとする。ドイツ人など、ごく気楽に「論理的」という言葉を口にする。翻って日本語では、「論理的」はいまだ市民権を得ていない。日常会話でこの言葉を耳にすることはまれである。

この「論理的」という言葉について、私には忘れられない思い出がある。高校生のころ、私はライン川のほとりに住んでいた。私が対岸への渡し場で船を待っている親で、子供の理屈を受け入れ、子供の考えを褒めていた。

この少女の例は、二つのことを示唆している。一つ目は、ドイツ語では「論理的」という言葉が日常語であるということだ。幼児が完璧に使いこなせるほど頻繁に、「論理的」という言葉が家庭や社会で使われているのである。私は日本語の堪能なドイツ人の友人に「論理的」を日本語に当てるとしたらどんな言葉になると思うかと尋ねたことがある。すると彼女は「やっぱり」ではないか、と答えた。日本人が「やっぱり」を多用するほど頻繁に、「ドイツ人は「論理的」を頻用する、という意味である。二つ目は、子供の論理的思考を受容する言語環境がドイツには整っている、ということである。少女が本当の意味で論理的であったかどうかは問題ではない。母親は子供が屁理屈を言っていることを知っていたはずだ。にもかかわらず、母親は子供の理屈を認め、子供の考えを褒めていた。

実を言えば、この少女の屁理屈を聞いたときの私の最初の印象は、ドイツ人はなんて理屈っぽいのか、というものであった。ウェンディに対する先の

と、五歳ぐらいの小さな少女が私の隣にいた母親らしい女性のもとにやってきた。ライン川の遊歩道は、中央が並木になっており、歩道は並木を中心に二本に分かれていた。少女が側に来ると母親が、「どうしていつものように川沿いの道を来なかったの？ 向こう側は駐車場が近くにあるから危ないから通らないように、と私はいつも言っているでしょう？」と少女に尋ねた。すると少女はすまして答えた。「今日私は新しい靴を履いているでしょう。昨日雨が降ったから、川沿いの道には大きな水たまりがあったの。そこを歩いて靴が汚れたら困るでしょう。私がかっちの道から来たのは絶対論理的なのよ。私、ちゃんと車に気をつけて歩いてきたわよ」「論理的」という言葉を耳にして、私は思わず少女の顔を見た。どう見ても「論理」など知らないような年齢である。それなのに少女は文法的に正しく「論理的」という言葉を使いこなした。その後の二人の話から、少女はどうやら川沿いの道にいた老人が大きな犬を連れていたのが怖くて別の道を通って来たらしいことが私には分かった。しかし、少女は自分の弱点をおくびにも出さず、見事に論理武装をして母親に対応している。一方母親は母

筆者の思いと同じである。論理の「ろ」の字も知らない子供が「論理的」という言葉を使うのを聞いて、私は生意気な少女の言葉に腹さえ立った。しかし日本に帰国して、高校、大学、企業、地域と様々な場所で人とかかわるうちに、私はこの国では論理よりも、ごり押しや泣き落としが幅を利かせ、些細な問題が感情的な対立につながりやすいことを体験した。そして、大人の間で屁理屈が多いことも。日本の言語環境では、子供が理由を述べ、排除されることが多い。これを何度も経験すれば、子供は黙って「知らない」ですませたほうが得であることを学ぶであろう。しかし、これでは子供の論理性は育たない。論理を知らない子供の理屈が、論理的に破綻した屁理屈であることは当然である。その破綻部分を修正し、正しい論理的な思考に導いてやるのが大人の努めである。そうした積み重ねの中で、子供は論理的に思考することの意味を学ぶに違いない。論理性を重視する言語環境は、家庭の中で「論理的」という言葉の使用が日常的になることから始まる、と私は信じている。

(つくば言語技術教育研究所)